

# 加害の記憶・長崎の「原爆の凶」展

——長崎における一九八〇年代の反核・平和運動——

服部 康喜

一

戦後の長崎における反核・平和運動の中で、一九八〇年代は特別な季節と言つてよかつた。それはバブル経済と呼応するかのように、長崎の反核・平和運動は大規模なイベントが企画され、かつてなかつた大量の市民の動員が実現したからである。したがつて、その教育的効果は世代を超えて大きなものがあつた。しかも、その企画・運営の中心には長崎のプロテスタントキリスト者が大きく関わつていた点が、この季節の特徴でもあつた。ちなみにそのイベントを挙げるとすれば「原爆の凶・長崎展」（一九八四）、「長崎平和の母子像」建設（一九八七）、「心に刻むアウシュヴィッツ・長崎展」（一九八九）がそれである。しかもそれらは沖繩―長崎―アウシュヴィッツを結ぶ加害の記憶によつて特徴づけられていたことに注目したい。さらにその連鎖の中に水俣が組み込まれてきたことを我々はやがて知ることになるだろう。そのいずれにお

いても中心的な役割を果たしていたのが日本基督教団長崎銀屋町教会小林正直牧師であつた。彼は「原爆の凶・長崎展」の事務局長として、また「長崎平和の母子像」建設および「心に刻むアウシュヴィッツ・長崎展」の企画構想と運営助言者として一九八〇年代の季節を先導したリーダーの一人であつた。もちろん彼のほかに長崎キリスト教協議会に属するプロテスタント教会牧師たち、聖フランシスコ病院長秋月辰一郎、長崎YWCAの葛西よう子、藤原祐子ほか同会会員、樋口美枝子（日本ポーランド協会長崎センター代表）などの平和市民団体代表者など、多くのリーダーたちを数えることができる。しかしその中であつて、労働組合やカトリックを含むキリスト教他教派、佛教、神社、政治家（その中に本島等長崎市長が含まれる）、反核・平和をめざす多くの市民運動のリーダーたちを束ねることができたのは、なによりも小林正直牧師の功績であつた。そして彼の牧する教会の教会員など、多くのキリスト者はボランティアとしてイベントの実質的な運営に加つていた。おそらく彼の存在なくしてはこれほどの動員は可能ではなかつた。その意味で、一九八〇年代の反核・平和運動はプロテスタントキリスト者が最も活動的な季節を送つた時代であつたと言える。ではなぜ彼らはかくも活動的であつたのか。そこには一人のリーダーの存在だけでは語り尽くせない様々な要因があつた。そもそも戦後日本のプロテスタント教会は、その初期において反核・平和運動には積極的ではなかつたことが確かめられる。その歴史を確認しつつ、その変貌の跡を長崎に限定して振り返つてみよう。

かつてプロテスタントキリスト者の原爆意識について、この誌上で考察を試みたことがあった<sup>(1)</sup>。その時、なによりも米国との和解が優先されたことによつて、戦後の反核・平和運動において反米意識がキリスト者の中で必ずしも先鋭な姿を取らなかつたことを指摘したことがあった。そのことと重なるが、今回は長崎に置かれたアメリカ軍政府との関係を、あるミツシヨンスクール(活水女子専門学校・活水高等高等女学校)の内部動向の中に探ることにしよう。

アメリカ進駐軍が長崎に上陸したのは一九四五年(昭二〇)九月二三日であつた。この当時の新聞は米軍の上陸に対して「女性に隙を見せるな。当日は男子も屋内に」(「長崎新聞」九・一四)と呼びかけ、「服装は必ずモンペを着用しアツパツパや下着のみで外出せぬこと、入浴行水等は遮蔽の上行ふこと、ハローとかヘイとか又は片言の日本語で話しかけられても女子は相手にならぬこと」と警戒を訴えていた。アメリカ兵は未知な他者であり、日本の戦前・戦中の教育によつて彼らは獣に匹敵する野蛮な人間であつたはずである。特に原爆が投下された広島・長崎にはアメリカ軍政府が置かれ、直接統治に近い体制が敷かれた関係上、長崎はまさに占領されたのであつて、アメリカ兵に対する恐怖は原爆の記憶が生々しい状況下にあつては想像を超えるものがあつたと見ていいだろう。しかし、彼らは陽気であり、人懐っこく、多くは善意の人であつた。アメリカ軍政府の要人の多くは、職業軍人であるよりは善良なアメリカ市民からの徴兵によつて軍人となつた

のだった。この当時のアメリカ軍政府の司令官はピクター・E・デルノア大佐であり、「デルノア自身が移民であることと、アメリカの掲げる自由と民主主義の精神を深く愛し、尊敬していたからであつた。そして同じように、アメリカ人が他国民の権利を奪うことも許すことはできなかった。デルノアは常に尊敬の念をもつて人に接していた」(レイン・アーンズ著・福多文子・梁取和紘訳『長崎居留地の西洋人』二〇〇二・二二 長崎文献社)。彼は長崎の復興に大きな貢献をした人物であり、彼の離任に際しては多くの長崎市民から感謝と親愛の言葉が贈られている。アメリカという他者はこのように決して敵対的な、また彼岸な支配者として長崎の地に登場してはいなかつた。特に長崎のキリスト教会にとつてはそうであつた。すでに引用した次のような記事はその間の事情をよく物語っている。

二十八日日曜日の午さがりミツシヨンスクールとして古い伝統に香る活水高女のさ、やかな一字でキリスト教をめぐる敬虔な日米信者の初会合が催された。進駐軍からは特に第二師団から指定されたエルブリッジ・W・バートレイ中尉をはじめ海軍牧師のクラーク・リチャード・クーパー師、ゼームス・L・ストパール師の三名、日本側からは武藤活水高女校長をはじめ四人の牧師、それに篤信の信者等が対応し、話しは日本の基督教が戦争中に受けた影響、日本における基督教の将来、基督教を通じた日米の友好親善について等尽きぬ信仰の話が恩讐を越え、民族の垣を打ち除いてお互いの胸と胸に交ふ暖かい信仰への誠をもつて語り続けられた。

(「長崎新聞」一九四五・一〇・三〇)

ここで演出されている日米の和解と対話が、長崎における原爆問題の難しさを語っていると見える。

そして、何よりも戦後長崎の復興は、長崎に設置されたアメリカ軍政府の力に負うことが大きかったことが、長崎市民の対アメリカ感情を複雑なものにしていることは否めなかった。ましてや長崎のキリスト教会は彼らと同じ宗教を共有しているのであり、戦後日本に沸き起こったキリスト教ブームはアメリカという戦勝者の宗教が、それ以前とは全く違った新しい価値観を日本にもたらしたことになるアメリカへの憧れと、同時にアメリカに対するコンプレックスが大きな要因であったことを考えるならば、原爆投下という事実が直ちに単線的に反核・平和と反米への路線にキリスト教会を導かなかつたことは当然でもあった。アメリカ軍政府が長崎のキリスト教会の復興に大きな貢献をしたことは既に記したが、身近な例からも長崎のキリスト教会とアメリカ軍政府との親密な関係をうかがわせる事実があった。

以下は長崎のプロテストタントのミッシヨンスクールとして長い歴史を誇る活水女子専門学校・活水高等女学校の卒業式次第の一部である。

活水女子専門学校第二十八回

活水高等女学校第三十六回

卒業式 次 第 昭和二十二年三月

一、開式の辞

一、奏楽 (以下讚美歌三五七、聖書朗読、祈祷、卒業證書

授与、賞状授与と続く)

一、校長告辞(続いて合唱)

一、知事告辞(江口視学代読)

一、軍政官祝辞(ニプロ氏代読)

一、市長祝辞 (代読)(以下、在校生祝辞、卒業生答辞、

讚美歌四四二、魂譲り、校歌、閉式の辞と続く)

これは当時の「校務日誌」に記された企画書の一部であるため、未定箇所があることはやむをえない。注目しなければならないのは、敗戦後二年目にして軍政府からの祝辞が読まれていることである。当時の軍政官(司令官)は陸軍大佐ビクター・E・デルノア。代読者の「ニプロ氏」とは長崎軍政教育官ウインフィールド・P・ニプロのことであり、長崎の教育の民主化が彼の任務であった。そのために彼は県下の小学校を訪れて、子供たちの前で民主主義を分かりやすく解説し、軍国主義的・国家主義的な教育の一扫を任務としていた。彼はユーモアに溢れた温和な人格者であり、残された写真を見ると、彼を見上げる子供たちの目には敬愛の念が満ちている。彼を特に有名にしたのは、戦後の民主主義教育の中で男女平等教育の実践としてフォークダンスを導入したことであった。やがてそのうねりは長崎から日本全国に波及することになる。このフォークダンスを普及させる上で大きな貢献をした三笠宮夫妻はニプロによってフォークダンスと出会い、日本フォークダンス協会に重きをなすことになる。皮肉とも取れるが、原爆の被災地から戦後民主主義教育の理念が発信されたのである。ちなみに長崎軍政府とのかかわりに関して活水とのある種の親密な関係をうかがわせる事実を指摘しておこう。活水女子専門学校および活水高等女学校の「校務日誌」によれば一九四六年(昭二一)九月一三日に次のような記事が書かれている。

深堀千代子氏活水辞任許可。進駐軍司令官書記トシテ任命セラレ宿舍々監トシテ片淵町ニ勤務兼テ日本語教授ノ仕事及軍属ニプロ氏随伴シテ教育視察ヲナス

当時、軍政府司令官デルノアは「アメリカ進駐軍本部を新大工町一六四番地の三階建ての建物に設立した。長崎進駐軍本部から通りを隔てて少し奥まった片淵町にアメリカ占領軍幹部のための宿舍（キャンプ・パットン）があった。宿舍内には兵舎、食堂及び小チャペルがあった」（R・アーンズ著前掲書）。深堀千代子が赴任したのはその地であったことは明らかだろう。同「校務日誌」の九月二日には「深堀千代子氏 就任昭和一八・八・二一 三年余勤務。体育主任、医務室係 退任昭和二一・九・二二」と記され、欄外に引用した記事と同じ書き込みが認められる。

この後、彼女が軍政府司令官書記としてどのくらいの期間勤務したのかは定かではないが、その職を辞した後、聖パウロ女子修道会のシスターの道を歩むことになる。また、彼女とは別に同じ軍政府教育官ニプロの秘書を務めていたのが、銀屋町教会会員である野村昭子であった。後、彼女は活水女子短期大学英文科でタイプライターを教えることになる。このニプロが推進していたフオークダンス（別名スクエアダンス）の伴奏を務めていたのが、同じ銀屋町教会会員である大塚（旧姓高原）和子であった。彼女は活水が主催した「新憲法発布記念音楽コンクール」（一九四六・一・一五）の出演者の一人であり、独唱および二重唱の伴奏を務めている。当時、彼女はまた音楽科二年の学生であった、後、活水女子短期大学でピアノ演奏を指導することになる。また、同じくニプロの伴奏を務めていたのが、後の活水女子短期大学音楽科

教授雨森幸であった。彼女は英文科教授岩崎やすと共に、アメリカメソジスト教会の招きで戦後最初のアメリカ留学を果たすことになる。

このように長崎軍政府との浅からぬ関係は、たとえば太平洋戦争によって心ならずも母国に帰還していた宣教師たちが長崎に再上陸した時にも見られた。「校務日誌」（一九四七・二・二〇）には次のように記されている。

カリー先生今夜七時半長崎駅着トノ報ニ女教師数名出迎ヘノタメ駅ニ赴イタガ進駐軍列車ガ佐世保行ニナツテイルタメ長崎駅着八午後五時頃トノ事ノ進駐軍カラカリー先生ノタメチ一プロ出ス事トナリマツ学校ニ来テカラ駅ニ赴ク由。

この他、次のような記事（同二・二二）にも注目しよう。

在東京ノ米ミッシンガ米海軍ノ食料ヲ購入シ学校職員ヘ贈物トシテソウフシタトノツウチニ接シタ 近々到着ノ管箱毎年必要ナ 経費ノ補助ヲ申出テ呉レトノ事ニ本校二〇萬（采）ドル（日本ノ円デハ約一四〇〇萬）ヲ申請スル事トシタ

当時、活水がいかに優遇されていたかが伺えるが、それは長崎のキリスト教会も同様であった。

カリー女史の日本帰国については既に記したが、彼女は一九三一年（昭六）活水女学校音楽科教授として長崎に赴任して以来、活水の音楽教育の中核を担った人材であった。彼女はまた、日本が対米戦争に突き進む中、日本政府や社会の圧力によって外国人教師の帰国が相次ぐ中で、最後まで日本に留まろうとした意志の人でもあった。日本の官憲の監視とアメリカ資産の凍結という状況の中で貯金の引き出しが不可能となつて、ついに彼女が最後の

外国人教師として帰国を決意するのは一九四一年(昭一六)九月であった。そして彼女こそ日本の敗戦後、真つ先に長崎に帰ってきた外国人教師であった。長崎再来に当たつての彼女の第一声は「大変幸福です。まるで自分の家に帰つたようです」(「長崎日日新聞」同一・二一)であった。戦後の活水の音楽教育は彼女の手によつて再建されることになる。

このように活水とアメリカ(特にアメリカメソジスト教会)との親密な関係は、精神的、物質的の両面において数多く見られた現象であった。たとえば「校務日誌」(一九四六・三・八)に記された次のような記事。

○在京米国宣教師団カラ本校職員へノ贈物ノ缶詰(?)着荷、午後分配方行ハレタ(バター、ジャム、粉鶏卵、ソーセージ、コーンビーフ、キャンデー等)

しかし一方で、生徒の日常生活の状況は次第に飢餓に近いものになっていった。たとえば「校務日誌」(一九四七・六・六)には「食糧事情困難ニツキ休校トス」と書かれているし、昼食の弁当を持つて来ない生徒が急増する中で下された決定は「食糧事情困難ノタメ明日カラ当分一校時四五分三校時マデノ打切りトスル事ニナル」(同六・一七)と記されている。この状況は県レベルでも深刻なものとして認識されていた。

○市内私立中等学校長会(輪番デ二時カラ)本校カラ村中、藤田両名出席(一)県カラ上田事務官列席、食糧事情ニヨル授業短縮又ハ休校状況ノ報告ヲ求メラル、学校トシテ半日授業トスル事、日曜ヲハサミ土曜カ月曜ヲ休校トスル事、暑中休暇ヲ従来通りトセズ八月下旬等ニ学校行事ヲスル事、等申

合セアリ

このような中で、アメリカのキリスト教会や民間団体からの寄付、いわゆるララ物資が届くことになる。

○病人乳幼児にララから贈物 長崎YMCA宛に

長崎YMCA社会部では未帰還者、戦死者、引揚者の救護事業を行っているが、今回ララよりミルクその他滋養品の配分があつたが右の内困窮者の病人、乳幼児などに配分することになった。(「長崎日日新聞」一九四七・二〇・九)

○女学生にララ物資配分

ララ物資として洋服を五十柄が本県に配分された。長崎、佐世保の女学生に配分される予定だが：(同一〇・一一)

このようにララ物資の送り先または配分拠点としてミッシヨンスクールやキリスト教関連組織や施設が利用されたし、配分の決定に当たつてはそれらが優先されたことが考えられる。また、これとは別に米国キリスト教各教派からの援助物資は直接に個別教会宛に送られていたことも確認できる。先ほど引用した記事(「女学生にララ物資配分」)に関して言えば、「この配分についてララ物資中央委員会のローズ女史が十八日来県打合せ、併せて県下の社会事業施設を視察する」と続いている。たとえば配分先の決定に関して、次のような記事がある種の示唆を与えてくれるだろう(「長崎日日新聞」一九四八・一・一六)。

第九回ララ物資県から聖母の騎士団に配分 聖母の騎士団ほか県下十七の社会事業施設に配分した。△食材一〇四二ポンド △石けん五三〇ポンド △鉛筆二四〇ポンド △サントニン一四〇缶 △衣服十五柄と二六四五点

またその前年、「総司令部ウヰノ宗教顧問来崎」(同一二・一七)という見出しのもと、次のような記事が書かれている。

総司令部顧問ウヰノ博士は十五日夜来崎、十六日午前中、活水、海星、常清の各校を視察、午後一時半から長崎軍政府宿舎内教会における宗教および宗教教育に関係者協議に臨んだ。十七日午前中に軍政府教会で開かれる宗教家との宗教に関する懇談会に出席、午後長崎発、諫早市鎮西学院中学、大村市純心女学校を視察する。

これらは戦後日本の再建をキリスト教によって行おうとするアメリカ占領軍総司令部の決意を物語るものとして記憶に留めておくべきだろう。このような背景の下、一般的に当時のキリスト教会とその関連組織・施設は物質的には恵まれていたといえる。このことに関してある教会の状況について次のような証言がある。

戦争が終わりましてから、教会は息を吹き返して盛んになっていくわけです。教会員たちもぼつぼつ戻ってまいります。／＼してもう一つ印象的であったのは、教会には物があつたということです。／＼戦後、アメリカ軍が真っ先に教会を訪問してくれたのを覚えています。チャプレン、或いはバプテスタの牧師であつた人が、タバコとかキャンデーとか、そういう物を持つて教会を訪問して来ました。／＼それから一、二年しましたら、教会に組織的に物資が運ばれて来るようになりました。衣料品と言いますと古着です。アメリカ人の着ている下着、／＼それから軍服に使っていたシャツだとかズボンだとかどんどん来るわけです。／＼他に女性服、子供服、そしてこちら側には缶詰、コーンビーフ、だとかソーセージの

缶詰などがズラツと並ぶのです。私はこれがどのような形で配られたのか良くわかりませんが、ただそれをめぐって醜い争いが起こつたのを覚えております。

この証言は戦時中にバプテスタ教会牧師として長崎に赴任していた藤澤繁牧師の子息藤澤一清氏(後、岐阜教会、花小金井教会牧師)の回想によるものである(「戦前・戦中・戦後の教会と私」神学セミナー講演、於天城山荘、一九九五年)。この証言が貴重なのは、少年の曇りのない眼を通して見られた教会の内側が描かれていることである。大人たちが眼を閉ざし、伏せていた光景であり、ほとんど例を見ない証言である。おそらく他のプロテスタント諸教会においても、物質的な豊かさは同様のものがあつたと推測していいだろう。

こうした物質的な状況とは別に、活水高等女学校・専門学校に關して言えば、戦時中に解職にあつたクリスチャン教師と職員たちが次々と復職を果たしている事実がある。これも長崎軍政府とアメリカミッシヨンの意向が大きく働いた結果と見ることが出来る。たとえば戦時中、解職に関する記事を見てみよう(「校務日誌」一九四四・四・三および六・一三)。

・退職者・秦 美種学校ノ都合デ退職シテモラツタ長年勤務セラレタ職員デアルガ萬止ム得ナイ残念ニ思フ

・食後懇談中、質問ニ答ヘテ校長ヨリ米村トシ氏解職ノ旨答ヘラレ更ニ：

前者は国語教師として長く奉職していた教師だが、復職後も国語教師として定年まで勤続、またアララギ派の歌人として名を成している。後者は英語教師として勤務していたが、スパイ容疑で検

挙げられた稀な例として記憶に残しておくべきだろう。彼女の行方はその後、不明のままだ。長崎の伝統あるミッションスクールは戦中、宗教主任がサーベルを着け、憲兵の監視の下で礼拝が行われていた様に、軍国主義の強い影響下にあった。戦後、活水からは教練と訓育指導を兼ねていた宗教主任が一名公職追放処分を受けている。その彼は元プロテスタント教会牧師を勤めていた人物である。記録に残っている教師の解職の例はこの二名だけであり、職員に関しては記録がない。しかし、戦後の復職の記事は数名の職員の記録があることを付け加えておこう。

あらためて言うならば、キリスト者である教師と職員は戦時下の息苦しい雰囲気の中ではむしろ被害者でもあった。彼らを救ったのはアメリカ占領軍であり、精神的にも物質的にもアメリカという他者は救世主でもあった。後に活水女子専門学校の二名の教師（英文科岩崎ヤスと音楽科雨森 幸）がメソジスト修道局（ミッションボード）の招聘を受けて、戦後初のアメリカ留学を果たしている（「長崎日日新聞」一九四九・四・五）が、この時期としては異例の早さと言える。それは軍国主義が謳歌する中で、キリスト教信仰を守ったことによる恩恵として与えられたとも考えられる。

そのアメリカの地で、岩崎ヤス女史は「Victim Glad Atombomb Ended War」と発信することになる（「長崎日日新聞」九四九・一〇・四<sup>③</sup>）。また活水は再来日したアメリカ人宣教師および教師の力を得て活水の再建に努め、後に活水女子短期大学創設（一九五〇）に進むことになる。彼女たちは院長・学長の任を負うカロライン・S・ペカム、英語教師を務めるアリス・ボイヤートとマージョリー・メイヤー、音楽教師を務めるヘレン・モーアとオーリーブ・

カリーであり、この内モーア女史とカリー女史は銀屋町教会の会員であった。

しかし、このような対アメリカ関係は、一方で反核・平和運動への取り組みを躊躇させる要因として働いたと考えざるを得ない現象を生み出していた。たとえば「校務日誌」（一九四七・七・三二）に書き留められた次の記事に注目しよう。

△八月九日（土）原子爆弾被爆三周年記念日多分本年八学校トシテハ何等ノ催シモナイ

この「校務日誌」は通称「藤田日記」と呼ばれるもので、執筆者は戦前・戦中・戦後を通じて長く教務に携わった藤田静雄で、その記録を克明に残し、戦後は活水中学の教頭として長くその職にあった人物である。彼の誠実な人柄が、時として客観的な記録である「校務日誌」を逸脱して、彼の個人的な感想を書かせることがあり、それが「校務日誌」の魅力になっていることは否定できない。引用した彼の記述の中に、ある種の無念さと空しさを読み取ることは十分可能であろう。実は、原爆投下によって死亡した活水生（高等女学校、専攻科および女子専門学校）と教職員は八九名に上るのだが、一九四五年（昭二〇）九月一五日に「戦災物故者追悼記念式」を挙行して以来、この種の公式行事が何も行われていなかった。「校務日誌」の記述に潜む感情は、そのことへの無言の抵抗を物語っている。被爆一月後の追悼式の後、この学校では公式に原爆犠牲者追悼式は開かれてはいない。戦後活水の再建には資金的にも人材の上でも、多くをアメリカに仰がなければならなかった状況をそれは雄弁に語っていると言える。そのことは長崎の私学が置かれていた状況だけではなく、プロテスタントキリスト教

会全般の事情と共通していた。もちろん、カトリック教会にもそのことはあてはまる<sup>(4)</sup>。長崎における反核・平和運動が単線的に反米へとつながらなかつた事情がそこにあつた。プロテスタントキリスト教会に関して言えば、反核・平和よりも、戦後のキリスト教ブームの中で、教会の再建と、それまで抑圧されていた伝道・布教運動へ堰を切つたように雪崩れ込んで行つたのである。

### 三

しかし、一九六〇年代になると状況は徐々に変化を見せ始めていた。その間の事情を次の引用によつて示そう（『日本基督教団史資料集』第四巻第五編「日本基督教団の形成一九五四―一九六八年」一九八二・一 日本基督教団出版局）。

一九五〇年代における教団の伝道は、主として北米からの莫大な資金によつて多くのことを試みたが、教勢はあまりあがらず多くの問題に突き当たつた。それは中産階級の枠を出なかつたし、農村や漁村の人々や労働者の中に入つて行くのは困難であつた。このような困難を乗り越えるためには、社会や政治や経済の諸問題と取り組まざるをえないことも知つた。そして、これまで一定の教会観を前提にして行つてきた伝道に対する反省から、教会および教団そのもののありかたへの問いが、教団の内部から出てきたのである。この時点で宣教研究所の招きによりクレーマーが来日し、一九六〇年一〇月に天城山荘でおこなわれた協議会において、閉鎖的で自己目的な日本の教会を批判し、日本の風土とキリスト教、

諸宗教との接触、教職と信徒の問題などに関して鋭い問題提起をした。つづいて、翌年の一九六一年三月には「クレーマー提案研究会」が開かれ、教団はクレーマーの教団に対する批判や提案を検討して、これを具体的に生かさうとした。それから各教区の宣教基本方策をまとめるなど準備がととのい、第二回宣教基本方策研究協議会が同一〇月に開催され、「日本基督教団宣教基本方策」が作成され、常議委員会によつて採択された。宣教基本方策が目指したのは、すべての人々への宣教の責任を果たす教会、この世に奉仕する教会の形成ということであり、そこで強調されたのは、自己中心的殻を破つて社会的責任を担う教会への「体質改善」と、地域社会に対して連带的に働きかける「伝道圏伝道」ということであつた。そこでは信徒の日常生活が伝道の場になる。信徒の役割を強調したのはクレーマーであつた。

長い引用になつたが、日本基督教団の内側からの改革・革新はヘンドリック・クレーマーという、いわば外側からの提言に始まつたといえ、画期的なものであつた。そのことの意味は、日本基督教団の真の戦後が始まつたということなのである。同時に、その背景には戦後の冷戦の激化によつて反共の名の下に多くの国に政治的な介入を開始したアメリカ政府の動向が色濃く反映されていた。特にベトナム戦争が象徴するアジアへの介入はアメリカ政府の財政を圧迫し、かつての敗戦国への援助が継続できない状況を生み出していた。一九五〇年代の日本の驚異的な経済復興は、アメリカ側にとつては日本の財政的な自立を促し、資金面での日本からの撤退を進める絶好のチャンスでもあつた。このことはキ



リスト教会においても同様であり、「宣教百年」（一九五九）を間近に迎える日本のキリスト教会にとつて、アメリカの教会からの自立は喫緊の課題でもあった。思えば日本の開国以来、アメリカという他者はどれほどの多額の資金援助を日本に提供してきたことだろうか。日本はもはやアメリカの養育すべき子供ではなく、パートナーとして自立すべきなのである。そのための体質改善が必要な時に来ていた。その時打ち出されたのは「伝道圏伝道」という概念であった。

この「伝道圏伝道」の概念を当時のパンフレット（教会の計画一九六四年度）にしたがって簡単に概括するならば次のようになる。まず（伝道圏の設定）という項目に関して「教会の宣教の責任区域を自覚し、全日本の伝道の責任を分担する意味で伝道圏を設定する」として隣接教会との協力を促している。これは「伝道圏はなわばりではない。隣接教会との和解・協力・分担ということが、よい話し合いの関係の中で自覚される必要」があると説明されている。これは従来の教派の勢力拡大を中心とした伝道から、教派を超えた連携を勧めるものであった。さらに「地域内諸団体との協力」という項目に関しては地域の問題を共通に担うことにおいて、教会は他の地域内諸団体に対して心を開くことを勧告し、教会は孤立して存在するものではなく、またキリスト者に関わるだけではなく、地域を非キリスト者を多数含む共同体として捉えなおし、共同体すべての人々に積極的に関わることを説いている。このことは教会の任務を伝道主体から奉仕主体へと大きく転換することを意味していた。したがって「地域内の社会福祉活動、青少年活動、老人問題、地方政治、社会教育その他に対してどのよ

うに奉仕するか」ということを教会が担っていく課題として積極的に打ち出している。

このように日本基督教団の体質改善は、その根底に教会を社会的存在として見直し、地域に生きる他者の発見と出会いを勧め、社会と人々に積極的に関わる教会というあらたな概念を提示するものであった。これらの活動を通じて、あらたな信者の獲得と教会の活性化が目指されたが、そのことはキリスト者個人の日常生活を通して行われるべきものであった。まさに「日常生活が伝道場になる」のである。この「伝道圏伝道」の概念の提示によって、以後、政治運動や社会活動に果敢に関わるキリスト教会とキリスト者に出会うことになるはずである。また、そのようなリーダーを地域も教会も必要としていた。それと符合するかのようにならば、日本基督教団の内部に新しい人材が生まれていた。『日本基督教団資料集』（前掲書第四巻第五編）の記述を見てみよう。

一九六〇年代には新しい世代が徐々に教団のリーダーシップをとるようになった。ちなみに、第一四回教団総会（一九六六）の教職議員平均年齢は四九歳であった。これら若手の人々がこの時期の教団のリーダーシップを握ったのであり、彼らが宣教基本方策や次に触れる宣教基礎理論の担い手であった。これまでの教団のリーダーシップをとってきた人々にとっては、教団内部の諸教派的伝統の間に一致を図ることが最大の目標であり、教団信仰告白もその産物であった。しかし教団は一九六〇年代にこの世を発見したといえる。

新しくリーダーシップを握った世代は、戦時中に徹底した軍国主義教育を受けてきた世代であつて、戦後の価値観の転換は彼らに

とつて大きな衝撃をもたらしていた。その意味で戦前・戦中からの脱却は喫緊の課題であった。この時点で戦後の教団の変化を物語る大きな出来事は、当時の日本基督教団総会議長鈴木正久の名で宣言された「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」（いわゆる「戦責告白」）であった（一九六七）。

（前文略）我が国の政府は、そのころ戦争遂行の必要から、諸宗教団体に統合と戦争への協力を、国策として要請いたしました。／「世の光」「地の塩」である教会は、あの戦争に同調すべきではありませんでした。まさに国を愛する故にこそ、キリスト者の良心的判断によって、祖国の歩みに対して正しい判断をなすべきでありました。しかるにわたくしどもは、教団の名において、あの戦争を是認し、支持し、その勝利のために祈り努めることを、内外にむかつて声明いたしました。まことにわたくしどもの祖国が罪を犯したとき、わたくしどもの教会もまたその罪におちりました。わたくしどもは「見張り」の使命をないがしろにいたしました。心の深い痛みをもって、この罪を懺悔し、主にゆるしを願うとともに、世界の、ことにアジアの諸国、そこにある教会と兄弟姉妹、またわが国の同胞にこころからのゆるしを請う次第であります。（以下略）

この宣言文は、発表当時からさまざまな批判に晒されることになり、教団内部においてさえ戦争の評価に関して未だ統一した認識は確定していなかったことが明らかとなる。しかしようやく、戦後のあらたな歩みへの一步を教団が主体的に行おうとしたことは最大限に評価すべきだろう。この宣言が定着するのは、後に見る

ように一九七〇年代以降、戦後第二世代の牧師たちの登場によってであることが明らかとなるだろう。

すでに見て来たように「伝道圏伝道」の概念に含まれる地域社会との連携およびその問題への積極的な関与という教会の使命への自覚、そして戦争に対する深い罪責、これらは両輪となつて教会の社会的な奉仕活動を活性化することになる。長崎に関して言えばようやく原爆が、アメリカという他者からの相対的な自立をなした教会が取り組む課題として浮上する季節をむかえたということなのである。たとえばそれ以前にも原爆に関しては被爆者の救済という具体的な行動がみられたが、少なくとも長崎においてはその実りは長続きしなかった。日本基督教団が、その内部組織としての日本基督教協議会と日本キリスト教奉仕団の名で行つた「広島・長崎キリスト教被爆者福祉センター」事業は一九五八年（昭三三）の開始から三年余りで資金難のため中止となり、長崎ではそれに代わつて「長崎被爆者福祉会」が設立されることになる（一九六一・四）。これは長崎平和記念教会に事務所を置き、教会設立と同時に建設された長崎友愛社会館の診療部が被爆者の診療と生活相談に当たるといふものであった。ちなみに長崎平和記念教会は原爆投下地に近い場所に、プロテスタント教会を建設したいという米国教会の意向と援助の申し出があつたことから計画されたものだが、戦後の混乱の中で遅々として進まず、結果的に日本基督教団によって設立された教会である（一九五〇）。同時にアメリカメソジスト宣教局婦人部（海外婦人伝道協会）が、長崎に建設した水濱幼稚園（一九二〇年設立）を受け継ぐものとして、幼児教育と福祉事業の拠点を再建したいとする意向によつ

て平和記念教会に併設する形で建設されたのが長崎友愛社（館）である（一九五一・六）。この長崎友愛社会館は現在、長崎市内で唯一のプロテスタントキリスト教の伝統を受け継ぐ友愛社保育園・幼稚園として存続している。

このように被爆者の福祉センターとして設立された「長崎被爆者福祉会」はその一年後には廃止されている（一九六二）。すでに国会では被爆者医療法が公布されており（一九五七）、公的機関による診療や福祉事業が進む中で、民間の施設はその役割を失っていた。遅きに失したというのは、プロテスタントキリスト教会が、長崎という地域とそれが抱える課題に対して主体的に関わるまでには「伝道圏伝道」という指針が示されるまで待たなければならなかった、ということを意味する。被爆者の発見という現象は、一九五二年（昭二六）の「原爆乙女（娘）」の発見からすでに始まっており、その発端は広島流川教会谷口清牧師が設立した「広島ピースセンター」による原爆乙女の治療であった。やがて原爆乙女のアメリカでの治療とその影響は、日米の和解という政治的なシナリオを持ちつつも、結果的に被爆者の発見と被爆者援護という大きな流れを作ることになった。その結果が、被爆者援護法の制定まで導くことになる。谷口清牧師の呼びかけによる長崎原爆乙女の物語は、感動的でありつつも、結果的に長崎が、またプロテスタントキリスト教会が原爆に対して主体的に関わることの遅れを物語るものでもあった<sup>5)</sup>。この「長崎原爆乙女（娘）」の物語とその余波の中で、第一回の「長崎・原爆の凶」展が開催されることになる。

#### 四

先にも述べたように、第一回「長崎・原爆の凶」展は「長崎原爆乙女（娘）」の発見とその余波の中で偶然的に開催されたものだが、実は偶然とはいえ、被爆者救済という大きな渦へと長崎市民を動かす一連の契機となっていた。その間の事情は次の記事によっても伺われるだろう（長崎日日新聞「一九五二・一二・二七」）。

原爆被害者の救済へ、婦人会も起上る 街頭募金や催し物で  
／長崎市に組織網を持つ長崎婦人会では原爆娘を初め一般原爆被害者の救済運動を強力に推進しようとして二十六日午後三時から長崎市飽ノ浦町二ノ一九八山口初子さん（同会副会長）宅に各地区代表十一名が集まり、原爆娘ならびに一般原爆被害者救済運動役員協議会を開き、具体的対策を協議した結果、  
①原爆被害者運動は、原爆娘東大治療を中心に一般被害者にまで拡げて行う。②五人の選ばれた原爆娘さん達に見舞の金一封を贈るなど運動方針を明らかにした。一月十五日から同月末まで全会員が各地区毎に街頭募金を実施するほか募金舞踏会、映画会など各種催しものを行う。また、一月十五日から長崎市で開かれる「原爆の凶」展覧会に積極的に協力するなど実際運動方法を取り決め、アトム主婦の力を結集して強力な救済活動に乗り出すことになった。

まさに原爆被爆者救済への市民的運動の高まりの中で、第一回「長崎・原爆の凶」展が開催され、当時市民がそこに何を期待し、何をしようとしたのかが理解できるだろう。それは何よりも原爆の悲惨さであり、その想像を絶する被害と犠牲の大きさであった。

その時展示されたのは「原爆の図」連作の内、第一部「幽霊」、第二部「火」、第三部「水」第七部「夜」の一部であった。入場料は一〇円、入場者数は約五〇〇〇人に上った<sup>6)</sup>。この時の共催は市教育委、婦人会、宗教連盟、美術振興会、医師会、県評、地区労、三菱造船労組、市教組、市従組、全日自労、電鉄労組、ABC労組、全電通、みどりの会、わだつみの会、平和を守る会、長大学芸学部・経済学部両自治会、ユネスコ学連支部、在日朝鮮人民主統一戦線、合計二三団体であった。これを見る限り、労働組合の圧倒的な力を感じないわけにはいかない。場所は旧労働会館行動（今の勤労福祉会館）であり開催日時は一九五三年（昭二八）一月一五日から一九日までであった。この第一回「長崎・原爆の図」展から三一年後に、第二回「長崎・原爆の図」展（正式名称は「原爆の図・長崎展」）が開催されることとなる（一九八四・八・八〜二二、於 長崎市民会館地階展示ホール）。第一回展示から三一年を経て、そこに大きな変化があった。

この第二回「長崎・原爆の図」展を実質的に企画、運営した人物に、長崎銀屋町教会小林正直牧師がいた。彼は一九三一年（昭和六）二月に神戸で生まれ、関西学院高等部から同大学神学部、同大学院を修了。日本基督教団宇和島仲町教会、同近永教会牧師から、京都西田町教会牧師を経て、長崎銀屋町教会牧師として長崎に赴任していた。彼の二回目の赴任先であった近永教会は、日本基督教団が「伝道圏伝道」の試験地として特別に指定した教会であり、地域社会との関わりを模索する新しい教会の任務を負っていた。その後の赴任先であった京都西田町教会では、水俣病訴訟裁判に関わり、水俣病患者と水俣の地と深い関係を結ぶことに

なる。長崎への赴任を彼が承諾したのは、水俣と地理的に近い関係にあったことがその要因の一つであった。小林正直牧師は幼少期から中学校時代に徹底した軍国主義教育を受けた世代に属し、その結果、戦後第二世代の牧師にほぼ共通したりベラリズム―反国家主義と反強権主義をその血液に滲ませていた。

長崎銀屋町教会牧師としてほぼ一〇年を経た当時、彼は長崎のプロテスタントキリスト教会を束ねる長崎地区伝道協議会委員長を兼ね、この「原爆の図」展に多くのキリスト教会とその会員がボランティアとして参加する先導役を果たすことになる。彼がその開催を呼びかけるきっかけになったのは、「原爆の図」展が京都（入場者数約三〇、〇〇〇人、於 京都市美術館）から熊本（同約一五、〇〇〇人、於 熊本市民会館）へと巡回する予定の中で、彼が深く関わっていた水俣から熊本展の実行委員長長神田公司の紹介を受けたことに始まる。まず、長崎での「原爆の図」展開催に向けて、発起人（呼びかけ人）を組織、ついで「ながさき「原爆の図」をみる会」を結成、丸木位里、俊夫妻を迎えての懇談会「丸木位里、俊の夕べ」の開催と休む時のない活動を展開する。また自らは事務局長として具体的な交渉、運営に当たった。

時に彼はまさに働き盛りであって、また牧師という職業柄、比較的自由な時間に恵まれてこの事業に専念できる態勢にあった。また銀屋町教会会員を含んで彼を支える多くのキリスト者にも恵まれていた。同時に若い世代（青年層）の導き手としての人望を生かして、彼らの動員も可能であった。そのため長崎大学を始めとする多くの大学生、高校生のボランティアが参加していた。取り分けて彼の功績は、当時長崎市に数多く存在した反核・平和市

民団体や労組、宗教諸団体を糾合できたことであつた。これも牧師という職業が、イデオロギーを超えた結びつきを可能にする要因として働いたと言える。ちなみに「原爆の図・長崎展」の呼びかけ人として名を連ねた人物は、本島等（長崎市長）、秋月辰一郎（聖フランシスコ病院医長）、市丸道人（核戦争防止国際医師会議長長崎支部長、長崎大学教授）、岩永正人（長崎青年会議所理事長）、小川緑（中島川を守る会会長、画家）小田原登志郎（活水学院院長）、大淵道開（金光教長崎教会会長、木津義彰（悟真寺住職）、具島兼三郎（総科大平和文化研究所所長、小池スイ（県婦人団体協議会会長、小泉三郎（県生協連会長）、佐田稲子（作家）、哲翁昭邦（医師）、西村義臣（長崎キリスト教協議会委員長、市PTA連副会長）林京子（作家）、野下千年（カトリック長崎大司教区師牧企画室長）、林重太（長崎総合科学大学理事長、深堀勝一（県被爆者手帳友の会会長）、福山豊（長大生協理事長）、藤田稔（神社庁長崎支部長）、藤原祐子（長崎YWCA会長）、松永照正（長崎国際文化館館長）、松本凡人（長崎YMCA総主事）、本原邦堂（大音寺住職）、本山寿恵子（日本婦人会議県本部議長）、諸熊武康（長崎ユネスコ協会会長、医師）、諸谷義武（県美術協会会長）、八木幹弼（立正校正会長長崎教会長）、山口仙二（日本被団協代表委員）、山田市太郎（原爆遺族会会長）、吉田満（県被爆者手帳友愛会会長）であり、その他、大学教授の名がみえる。またこの中に名前が上げられていないが、三菱労組の荒川澄がこの企画展に深く関わっていたことが判明している。「熊本・原爆の図」展の開催に向けて動き出した昨年（一九八三）六月ごろから、彼の元に長崎での開催の誘いがあつたことが記されている（「原爆の図・ながさき展記録集」）。これで見ると、

おそらく水俣経由と熊本経由の二つのルートから「原爆の図」展開催の誘いがあつたと見ていいだろう。この後も、小林正直牧師の活動に長崎三菱労組は大きな支援を継続することになる。

ところで「原爆の図・ながさき展」は入場者数約八、〇〇〇名を数えることになるが、事務局のボランティア（西村秋子）の回想にあるように広汎な市民の動員が実現したのだった<sup>7)</sup>。

今度の運動で特徴の一つに挙げられるのは、いろいろな宗教関係の協力と言うことだと思ひますが、仏教や金光教や立正校正会、又、キリスト教ではカトリック教会、プロテスタント教会のご支援も忘れられないことです。お蔭で会社員、農業、漁業、建築業、医師、商業、教師、主婦や学生、その他たいへん広い範囲の人々と共にこの展覧会を開くことが出来たのだと思ひます。又、長崎市内の小中学校のPTA、政治的には異なつた立場の労働組合、教職員組合、様々な市民団体など、普通にはとても一緒に協力して下さるとは考えられないような大きな団体の支援がなければとても今回の結果は望めなかつたでしょう。

このことは小林正直牧師自身が次のように記していることから明らかである<sup>8)</sup>。

平和教育をめぐる教育委員会と教職員組合、非核三原則を巡る佐世保市と長崎。核問題をめぐる被爆世代と新世代、原水禁と原水協そして核禁会議。「祈りの長崎」といわれているが、一皮めくると年々分裂が増幅されているなかで「原爆の図」展は開かれた。県と市とそれぞれの教委が後援し、教組の協力は勿論、中間世代が子供に語り伝える姿があちこちで現出

し、各労組も後援や協力を惜しまなかった。八月九日などは、同じ会館で原水協の大会があり、前の広場ではのぼりをお立て、マイクでアジっていた中核派も、互いの参加者が会場に姿を見せ、市長も教育委員長も来て、静かに「原爆の図」をみていった。

しかし、「原爆の図」を眺める側の解釈は様々であつても、主催側においては明確な意図があつたことを確認しておく必要がある。それはパンフレットに記された次の「わたしたちの基本的立場」が明瞭に語っている。

かつては、個人と個人が互いに名のりをあげてのいくさであつた。しかし、核兵器による破壊は大人と子供、男と女、善人とそうでないものの区別なく、思想も信仰も、国籍・党派等のいかなる相違もなく、人間と他のあらゆる被造物を一瞬にして瓦礫・灰燼と化す。この事実を前にし、いまや人類の悲惨と尊厳への問いとして、同時に基本的人権への挑戦としてこれを受け止める時、「人間として」なかならずくわれわれ自身が身をもつて体験した惨状をいかなる地にも起させず、恒久の平和を希求して止まない長崎市民として参画する展覧会であることを願ひ、加えて被爆の体験を単に被害者の立場のみにとどめることなく、展示予定作品「からす」にある如く、同時に加害者としてこれを受け止め、ここにわれわれは丸木位里・俊筆「原爆の図」展を開催するものである。(以下略)

ここに謳われている「加害者」の視点こそが、小林正直牧師の真の意図であつた。この「原爆の図」展に展示された「からす」は

「原爆の図」五部連作の内、第一四部にあたり、朝鮮人被爆者の死体をカラスが啄んでいる情景を描写したものである。しかも左画面には白いマ・チヨゴリが風に舞つて故国へと飛んでいく情景が描かれた作品である。この第一四部「からす」の意味を小沢節子氏は次のように読み解いている<sup>9)</sup>。

初期「原爆の図」に可能性として描かれた「欠如の存在」には、加害と被害の両義性をまとつた兵士の姿も含まれていた。だが、そうした両義性は、必ずしも兵士に限るものではなかつた。人なつこく稚氣あふれる存在であると同時に、集団となつて朝鮮人の死骸を啄むからすに、夫妻は差別と抑圧を心の内奥に抱え込んだ日本の庶民の姿を、そしてその一員としての自分たちの姿をも見たのではないだろうか。

おそらく、この解釈は正しい。「長崎・原爆の図」展が目指したのは、被害の惨状の向こうにある加害の記憶なのだ。もちろんそのことが鑑賞者のすべてに理解されたかどうかは、別の問題である。この加害の視点は丸木位里・俊夫妻も共有した認識であつて、小沢節子氏は次のように概括している<sup>10)</sup>。

初期「原爆の図」が強い内的な動機によつて描かれ、中期「原爆の図」が平和運動の高揚を背景に描かれたのに対して、後期「原爆の図」は一九七〇年代の戦争責任論の流れのなかで外からのたらしきかけに応じて制作されていったものといえるかもしれない。

この「戦争責任論」が広く共有されようとしたのが、一九八〇年代の長崎であつたし、小林正直牧師を始めとするプロテスタントキリスト教会とその会員たちであつた。

この後、小林正直牧師の強い影響下にあった長崎YWCA（秋永唾子、葛西よう子および藤原祐子歴代会長）によって「長崎平和の母子像」建設が始められる。この像は平和公園内に建立され、一九八七年（昭六二）八月一日に除幕式が挙行されている。この像の制作者は沖繩の彫刻家金城実であり、読谷村長浜で制作されたものである。その背景には沖繩との出会いがあったことは明らかであり、「チビチリガマの悲劇」を含む沖繩の惨状と戦後沖繩の苦難に対する共感と責任が、「長崎平和の母子像」建設の基本にあった。さらに「心に刻むアウシュヴィッツ長崎展」の開催（一九八九・六・二二〜二九）と続くが、それは丸木位里・俊夫妻が辿った道程―「南京大虐殺」「アウシュビッツ」「みなまた」「おきなわ」―と重なる、加害の記憶を辿る旅程の最終地点であった。最終地点と言ったのはほかでもない、一九八〇年代の反核・平和運動をリードして来た小林正直牧師は「アウシュヴィッツ長崎展」開催を目前に控えて、五八歳の生涯を終えたからである。その早すぎる死と共に、それから五年後に開催された「ノーマア・ナガサキという前にく七三一部隊長崎展」（一九九四・三・二二〜一八）を最後に、圧倒的な教育的効果を誇った大規模イベントの時代は終わることになる。

## 注

- 1 拙論「アメリカ占領下における〈プロテスタントキリスト者〉の原爆意識」（『原爆文学研究1』二〇〇二・八・一 花書院）。
- 2 拙論「アメリカ占領下における〈プロテスタントキリスト者〉の原爆意識」（前掲）。
- 3 拙論「アメリカ占領下における〈プロテスタントキリスト者〉の原爆意識」（前掲）。
- 4 拙論「ある都市の選択―田中千禾夫『マリアの首』と浦上天主堂再建計画」（『叙説Ⅲ』一九九一・一・六および『叙説Ⅴ』一九九二・一・六 叙説舎）。
- 5 拙論「非完結への勇気―〈長崎原爆乙女〉の物語と『マリアの首』―」（『原爆文学研究2』二〇〇三・八・一 花書院）。
- 6 『原爆の図 ながさき展記録集』（一九八四・二二・二〇 ながさき「原爆の図」を見る会）。
- 7 『原爆の図 ながさき展記録集』（前掲）。
- 8 『原爆の図 ながさき展 あなたの協力を』パンフレット。
- 9 小沢節子『原爆の図』描かれた（記憶）、語られた（絵画）』（終章）（二〇〇二・七二五 岩波書店）。
- 10 小沢節子『原爆の図』描かれた（記憶）、語られた（絵画）』（終章）（前掲）。